詩『それでも　わたし』

わたしは　生まれたとき
600グラムだったという
でも　今は　大きくなれた
わたしは　目がよく
　見えないけれど
何でもできる　字も書ける
わたしは　指が
　足りないけれど
この手でちゃんと
　折り紙できる
わたしは　リコーダー
　つかえないけれど
大きな声で　歌ならうたえる
わたしは　体育
　にがてだけれど
国語は自分で　得意と思う
わたしは　姉妹は
　いないけれど
いとこの姉ちゃんが
　いてくれる
わたしは　友だち
　少ないけれど
何でも話せる　仲間がいる
わたしは　母さん
　いないけれど
いつもばあばが
　守ってくれる
わたしは　生んでくれた
　母さんに
「ありがとう」と　言える
わたしは　母さんが
　生まれてくれて
「ありがとう」と　言える
わたしは　ばあばを
母さんとよぶ
それでも
わたしは　わたし
わたしは
わたしが　大好き

この詩は、小松島市の小学校2年生（当時）の児童が書いた詩です。初めて読んだとき、彼女が自分を見つめ、力強く生きる姿に胸が熱くなりました。後に詩を書いたきっかけを聞くと、こう話してくれました。

「当時、私は目が見えず真っ暗な部屋にいるようでした。『失明の危険性がある』とまでお医者さんに言われ、とてもショックでした。でも、奇跡で少しずつ目が見えるようになってきました。そのときに書いたのがこの詩です。」

「自分のことを好き。自分っていけてる」と思える感情は、自尊感情や自己肯定感などと言われ、この感情を育むことの大切さが、人権教育では重要視されています。反対に、「自分のことが嫌い。どうせ自分なんか」と思う感情は、自分で自分を差別する自己差別感情と言われています。

詩の中で、彼女は「生んでくれた母さんに『ありがとう』と言える」と綴りました。そして最後に「それでも　わたしはわたし」「わたしは　わたしが大好き」と結んでいます。

彼女をここまで豊かに育んだものは何なのか、じっくりと読み解きたいものです。

【徳島県小学校人権教育資料『ひかり』2年生版より】

市教育委員会生涯学習課
人権教育推進室（新教育庁舎2階）
☎32・3814
FAX 33・1230
✉ jinkenkyouiku@city.komatsushima.i-tokushima.jp

市民文芸　花みずき歌壇（419）　山崎泰子・選

白菊の飛びたたぬ世に涙するわが夢たぐる葉月十五夜
　田浦町　岩田　泰一

園庭にやわらかき声「よーいどん」両手ひろげて先生が待つ
　日開野町　森　理子

鎮もれる旅所の裏に雑木生い祖谷街道に人影も無し
　松島町　萬野　行子

自信持てきみにはきみの指導法児童を染めないきみは正しい
　横須町　天王谷　一

谷川のせせらぎ耳に目は花に　心は青き空に預けぬ
　松島町　六田　靖子

アリたちのまじめな列にとどきいる巨樹の葉かげのややあかるんで
　小松島町　萬宮千鶴子

新札も使うものなり有効に貯める苦労はしないゾたぶん
　前原町　福元　英夫

あまたなるアルバムのなか笑う笑う昭和の時代の家族の写真
　中田町　湯浅　百代

娘からスマホに「ピッ」とＬＩＮＥあり「ハッピーバースデーお父さん」
　小松島町　綴木　茂治

燃ゆるものまだ幾らかは遺りいむサルビアは秋の陽の中に照る
　中田町　松並　敦子

《今月は、固定資産税・後期高齢者医療保険料３期分、国民健康保険税・介護保険料４期分の納付月です。》忘れずに納期限内に納めましょう。市税の納付は、確実・安心・便利な口座振替をご利用ください。